

第5章 今月（2017年11月）における予測分析シナリオ・アップデート

「表向き世界史の扉が開かれるこの11月、同時にそれを裏側において実質的に支えている『簿外資産』の扉も大きく開け放たれることになる」——これが本稿の結論である。以下、詳細につき述べていくこととしたい。

（図表 5-1 焦土と化した「帝都東京」）



（出典：ハフィントンポスト）

一般に我が国では「戦後復興」についておおむね次の様に“信じられて”いる：

「米国勢による度重なる空襲によって焦土と化した我が国。しかし、日米同盟を選択する中、国防費を大いに削減することになった私たち日本勢は持ち前の技術力と根気良さで瞬く間に経済復興を遂げ、現在の冠たる地位を築きあげることに成功した」

いわゆる「司馬遼太郎史観」にも相通ずる感情的な歴史解釈であるが、現実はこの様な精神論だけでは語ることが出来ないことをまずは指摘しておかなければならない。弊研究所がこれまで累次公表してきた研究・分析において明らかにしてきたとおり、米欧系国際金融資本の“雄”や、その配下にある“越境する投資主体”らは概ね72年に1回のサイクルでとある諸国勢への投資スタンスを一巡させている。そしてこれが実現されるよう大量のマネーを陰に日向に供給するのがそのやり方なのであって、その結果として地球上におけるグローバル・マクロ（国際的な資金循環）のリズムは保たれてきているのである。

問題はそうしたグローバル・マクロ（国際的な資金循環）を巡るリズムが表向きの「神の見えざる手」、すなわちオープン・マーケットにおける不特定多数の参加者による投資行